第2期「まちの語り部養成」に向けて（2012年～）

持続可能な地域・社会づくりや持続可能性教育を進める上で、地震や風水害などの自然災害はとても重要なテーマとなっています。「環境教育」と「防災教育」を結び付け、人・まち・自然・歴史文化、各種将来予測等を統合的・体験的に学ぶアプローチ法は持続可能な社会構築に向けた教育（ESD）に求められるものです。そして、市民がこの「学び」を自らの価値観や生き方を見直すきっかけにし、地域理解を深め、地域のあり方を考え、行動に移すところまでを見据えておかなければなりません。

参加者募集

記念講演会

地理学から見た自然災害

講師：高橋　学 氏
立命館大学教授　文学部地理学教室

4月14日（土）13:00-15:30

場所：西宮市役所東館 大ホール

高橋氏は立命館大学文学部で地理学を専攻。環境考古学、災害リスクマネージメント博士。
阪神・淡路大震災以前から淡路島や神戸、西宮、尼崎などの環境考古学の調査をされており、被害の大きかった場所と昔の海や河川、湿地などの間に深い関係があることを指摘されました。自分たちが住んでいる土地が、どのような開発を経てきたのか。また災害に遭った歴史があるのか。“土地の履歴”を知り、危険性を知った上で、対策を講じたまちづくりが必要だと述べられています。

募集定員：８０名
費用：無料
申込み方法：
電話、FAX、e-mail で
氏名、郵便番号、住所、
電話・FAX を明記し
NPO法人こども環境活動支援協会
まで

まちの語り部養成セミナー2012　スケジュール

三井物産環境基金　活動助成事業

各回、講義の後、実地を歩きます。

回	日　時	テーマ地域	内　容
1	4月21日（土） 9:30-15:30	西宮	平安時代の海岸線をたどり、西宮の防災を考える 集合場所：西宮市役所東館801/802
2	5月12日（土） 9:30-15:30	甲山	甲山、鷲林寺、甲陽園などに見られる岩石、地層から西宮を見る
3	5月26日（土） 9:30-15:30	大社・夙川	滝のような川「夙川」と広田山の地形と文化から地域を考える
4	6月2日（土） 9:30-15:30	甲東	田畑広がる地域であった甲東地区の地形、水の流れから地域を考える
5	6月16日（土） 9:30-15:30	鳴尾	鳴尾の成り立ちと発展した産業を知り防災に活かす
6	6月30日（土） 10:00-15:30	未定	セミナー全体のまとめと、参加者でコース作りのワークショップをします。

＊コース内容に多少変更が生じる場合があります。

セミナー募集定員：各30名
費用：無料
申込み方法：電話、ＦＡＸ、e-mail で　氏名、〒住所、電話・FAX　を明記
連絡先：NPO法人こども環境活動支援協会
〒662-0832 西宮市甲風園1丁目8－1
TEL 0798-69-1185 FAX 0798-69-1186
e-mail: kodomo@leaf.or.jp

共催：NPO法人こども環境活動支援協会　西宮市

★★会員募集★★

当協会の活動は、個人や団体会員の方々のご支援によって支えられています。子ども達の環境活動を今後も支えていくために、随時会員を募集しています。
会員になっていただいた方には、環境研修会へのご案内や、情報誌等の資料をお送りします。

環境活動支援情報誌　りぃふ
VOL.37　2012年
編集・発行　NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）
〒662-0832　兵庫県西宮市甲風園1丁目8-1
ゆとり生活館アミ1階
TEL　0798-69-1185
FAX　0798-69-1186
URL　http://leaf.or.jp
E-MAIL kodomo@leaf.or.jp

環境活動支援情報誌　VOL.37

りぃふ

水位が異なるため、すぐには合流できず、
平行に流れる六湛寺川と東川

住宅街に残る井戸
現在も活躍している

中学2年生の「トライやる」での地域学習
阪神淡路大震災時に止まったままとなった
商店街のメモリアル時計の前で

甲山を望む農地で行っていることも農業塾（田植え）

防潮のための水門を見学する

テーマ：持続可能な地域づくり
～ 時間軸で社会・地域を理解する ～

もくじ

これまでの100年、これからの100年を考える　・・・・・・1
小川　雅由　（LEAF事務局長）

防災と環境の統合的視点での地域理解とまちづくり
西宮市セイフティ&エコガイド事業から　・・・・・・・・4
セイフティ&エコガイド活動マニュアル　ワークシート　・・・・・・・・5
第1期「語り部」活動について　・・・・・・・・7
エココミュニティ会議での地域学習　・・・・・・・・9
教育の現場での地域学習　・・・・・・・・10
第2期「まちの語り部養成」に向けて　・・・・・・・・11

未来が変わる。日本が変える。チャレンジ25

2012
Learning and Ecological Activities Foundation for children

これまでの100年、これからの100年を考える

ＮＰＯ法人こども環境活動支援協会(LEAF)事務局長　小川 雅由

昨年3月の東日本大震災における未曾有の犠牲者や被害の状況は、1995年に阪神・淡路大震災を経験した者にとっても異次元の災害と受け止めざるを得ないショックなものでした。巨大地震の連動、津波、原子力発電所事故など、阪神淡路大震災では経験のない出来事も起こりました。阪神・淡路大震災の際にも感じていたことですが、「自然災害」と「人為災害」との境界はどこにあるのかということを今回もまた痛感しました。

今年度の「りぃふ」では、持続可能な社会システムの構築とそのための教育（ESD）のあり方を考えることをテーマとしています。本号では、東日本大震災を踏まえ、「安全・安心で持続可能な社会」形成に向けた考え方を、連綿と続く大地の動きや気候変動といった地球環境の変化と、防災・減災といった観点も含めた人間活動のかかわりを整理しながら、人口減少、経済減速といった我が国の将来予測も踏まえ、今後の社会のあり様を考えたいと思います。と同時に、こうした社会像を実現するために地域においてはどのような視点が必要なのか。改めて、西宮市で1992年にスタートした地球ウォッチングクラブ（EWC）事業の原点である「暮らしと足元を見つめ直す活動」について再考し、西宮市における各種「地域理解」の取り組みについて紹介します。

■地球のしくみを「想定」しようとする人間の限界と責任

地震規模の大きさにも増して、阪神・淡路大震災や東日本大震災の被害状況の大きさは、人々の心に大きな衝撃を与えました。インドネシア、ハイチ、チリなど国外での災害被害も同様です。なぜ、これほどまでに人的被害が出たのか。防災対策が弱かったためか。建築物などの耐震構造が弱かったためか。危ない所に暮らしていたためか。人々の意識が足りなかったためか。人間の力や智恵の及ぶものではなかったからか。など色々な思いが交錯します。

日本はこれまで地震大国と言われ、学問的にも歴史的にも多くの経験知を蓄積してきているはずだったのに、今回もまた大きな被害が出てしまいました。しかも、原子力発電所での事故までも誘発し、放射能汚染という取り返しのつかない事態を招いてしまいました。

政府や自治体、企業の各レベルで、地震被害に対しても、津波被害に対しても、さらには放射能被害に対しても、課題ごとに一定の「想定」や「リスク管理」を行っていたにもかかわらず、何故という疑問が湧いてしまいます。

これまでも言われてきたことですが、原子力発電所などの建設の際の事前影響評価において対象施設だけを審査せず、周辺施設との複合的、又は様々な危険要因の相互作用による影響に対しても審査すべきではないかという懸念が現実化してしまったとしか言いようがありません。「個々にはＯＫだけれど、全部まとめるとＮＯ」で、結果的にその犠牲になるのは一体誰なのでしょうか。問題が発生した時の責任体制と問題解決に向けた対処、責任所在の明確化、問題要因の整理、将来への教訓化・マニュアルの改善といった一連の流れは、環境マネジメントシステム（ISO14001）の原点でもあります。

緊急時にこれらが機能しなかったとしたら、この事態を重く受け止めなければなりません。「想定外」の一言では片付けられないものです。

これらの問題の背景として、行政の縦割りの弊害や企業の組織防衛の姿勢があるのでは厳しい指摘もなされています。あらゆる組織の社会的責任（ISO26000）という国際規格を真摯に受け止めてもらいたいと切に願うところです。

■自然災害への対処の原点は過去から学ぼうとする姿勢

両震災で大きな被害を受けた神戸市や西宮市、東北の各自治体で、人々が暮らし始めたのはいつ頃からで、なぜ、そこに人々は集まってきたのか、そこは元々どのような土地だったのか。また、これまでどのような土地利用がなされていたのか。江戸時代には、人々はどこに暮らしていたのか。など、被害状況と土地の履歴の相関関係は阪神・淡路大震災後、大きな問題として取り上げられました。

当時、立命館大学の地理学教室の高橋学教授が、被災状況と500年、1000年前の地形・地盤との因果関係を明らかにされ、私たちも西宮市での被害状況と地歴との関係を市史などにある古地図などの資料と照らし合わせ検証を行った結果（P.7に記載）、見事なまでにその関係性が明らかになりました。

平安時代（1000年頃）の温暖な時期にはどのあたりまでが海だったのか。江戸時代の冷涼で多雨な気象になっていた頃、河川からの土砂運搬で自然埋め立てはどの程度進行し、河川や池沼、海浜はどうなっていったのか。地形の移り変わり（地歴）と災害の危険性はどのようにつながっていたのかを考えることは、極めて重要なことであったはずですが、なぜ政治や行政の優先施策に上らなかったのでしょう。

しかし、一方では「稲むらの火」や「てんでんこ」など口承伝承でとっさの津波対応を語り継いできた地域は被害を免れており、こうした事例が国内外で伝えられています。

非科学的に思えるかもしれない地域での「言い伝え」が、尊い命を守ることにつながったとすれば、その教訓を今後どのように受け止め、未来につなげていかなければならないかを考えなければなりません。

■国策優先の国づくりと人口増加 急速な臨海部開発と自然災害被害

明治に入ってからの文明開化、富国強兵の国家政策は、封建的な社会制度から近代国家形成に向けた足がかりを築いた半面、急速な近代化を求めたことによって、過去から蓄積された大切な価値観を捨て去ってしまったのではないだろうかと感じています。

そして、国家が大きくなることが成長の証しと、国土拡張の政策で欧米列強と対峙できるといった考え方で前のめりに戦争への道を走ってしまいました。

第2次大戦後は経済復興を柱に新たな国づくりへと舵を切り、日本列島のそこかしこに銀座通りが生まれ、臨海部には石油コンビナートを始めとする工業地帯が瞬く間に広がり、そこで働く労働者が地方から吸い寄せられ、工場周辺に居住地域が形成されていきました。各家庭では、家電製品や自動車を持つことをステータスにし、マイホームを所有することを人生の目標に懸命に働くことが当たり前のようになってきました。

この間の人口増加を見てみますと、1900年当時（人口約5000万人）から100年という短期間に1億2000万人に倍増しており、その要因としては国家政策（産めよ増やせよ）や科学・技術の発展、経済発展、食糧事情の改善、医療の発達、社会の平等化など色々な要素が考えられますが、いずれにせよ、大きくなることのマイナス面はあまり考えられなかったのではないでしょうか。

急増する住宅需要の中で防災の面から土地履歴を調べてから家を購入するというようなことは少なかったと思われます。阪神淡路大震災では、臨海部の1000年前に海だった所や400～700年前に河川だった所などで大きな被害がありました。また、人口急増に伴って建設された公立学校（避難所となっていた）が活断層上に並んでいたことも同じ発想によるものだったのでしょう。

高度経済成長を呼ばれた時期においては、人々の最も大切な価値観であるはずの「命の尊厳」も軽視され、家を売る側も買う側もそしてそれを許可する行政も住む場所の安全性への配慮をなおざりにしてしまっていたのではないでしょうか。こうした経済優先、物欲偏重の社会風潮は、10年以上も毎年3万人を超える自殺者を生み出している今日の社会構造と根底でつながっているのではないかと思われます。これは、年間1万人を超える交通事故死亡者を出していた「交通戦争」と呼ばれていた時代を超える「内戦状態」にあるとしか考えられない社会状況です。

まちに近い農地で、田植え、稲刈りの体験をする小学4年生農を通じて、生きものの循環、食を学びます。

■2060年の人口8000万人台、そして2100年の人口半減社会はマイナスか？

先だって、政府は2060年には日本の人口が8000万人台になり、3割の人口減になると将来予想を発表しました。これ以外にも、国立社会保障・人口問題研究所が平成14年に発表している日本の将来推計人口でも、2100年には、中位推計で7000万人、低位推計で5000万人を下回る数値が示されています。「人口半減社会」「人口１/３社会」と言われている問題です。これらの数値は少子高齢社会の問題を検討するための資料として出されたものなのですが、日本社会の根幹を左右する極めて重要なものだと思われます。これまでの日本の歴史で、人口が5000万人台だったのは、1900年頃に相当しますが、これまで100年かけて増加した人口が、100年かけて減少し、当時に戻ることになります。

現在、少子高齢社会のイメージは少ない若年層が高齢者を養う暗い時代として写っているのではないでしょうか。しかし、これからの社会においてどのような生き方が、豊かさで幸せなのかという価値観は、誰かに与えられるものではなく、自分たちで創造していくものでなければなりません。人間性を見失うような競争原理に左右されず、各世代が主体的に学び合い、生涯を通して社会のために楽しみながら働けるような環境づくりを目指せないものでしょうか。そのためには、経済基盤やエネルギー、食料など社会に不可欠なものを他に依存する構造ではなく、自立・循環する社会でなければならいと思われます。

■人口半減社会における食料自給と一次産業を支える社会のあり方

一方、今日の1億2000万人の人口を支える食料自給率はカロリーベースで40%となっており、海外依存度の割合は60%と高い状態となっています。日本における食料自給率の推移を見ると1925年当時（人口約5900万人）で85%程度だったようです。これから考えると、1900年の人口約4400万人の時代は、かろうじて食料自給が出来ていたようです。主食や副食は現在と大きく異なりますし、農業技術も飛躍的に向上していますが、2100年を想定した時の参考事例の一つになるのではないでしょうか。

農林水産業といった一次産業の就業者数が今後どのように推移していくかも食糧問題を考えるときに重要な問題です。2010年の世界農林業センサスによると、日本の農業就業者総数（販売農家）は約261万人で、65歳以上の農業従事者が約161万人で全体の60%を超え、65歳以下の就業人口は約100万人（15歳～29歳：9万人、30歳～39歳：8万7千人、40歳～49歳：14万7千人、50歳～59歳：35万8千人、60歳～64歳：31万9千人）です。ちなみに、1985年の農業就業人口は543万人でした。この25年間に農業就業者は半減し、高齢化率も高まり、耕作放棄地についても広がっている状況です。

現在の日本の食糧の60%は海外に依存していますが、これからも世界から食料を供給してもらうことは可能でしょうか。もし、難しいとすれば、国内での食料自給率を100%近くまで高めておかなければなりません。そのためには農林水産業の従事者はどのくらい必要なのか、5000万人の米や野菜を作るのにどれだけの土地をどこに確保するのか、田んぼに水を供給するために水源林として国土の森林を手放さずしっかり保有し、整備し続けられているでしょうか。これらを支えるための就業者数を具体的に算出し、制度計画を行っていく必要があります。また、温暖化や気候変動などによる自然災害の増加や生態系への影響、米や野菜の作付けへの影響などに対しても対処しなければなりません。

■2100年は遠い未来ではなく、今、生まれた子どもたちの生涯

今の中学1年生は50年後の2060年には62歳になります。そして2100年の日本の人口が5000万人前後となるという予測を踏まえた時、私たちはその時代に向けてどのような準備を行っていかなければならないのでしょうか。この時の世界人口の想定は、100億人（現在70億人）です。インドやアジア、アフリカ諸国で急激に人口が増加すると見込まれています。

今後、社会・経済・環境（自然災害も含め）の各側面で急激な変化が予測されますが、日本における持続可能な社会システムを考えていくには、2100年に到来する人口半減社会に向けた社会構造のシフトダウン（若しくはドラスティックな転換）や人々の生き方、ライフスタイルの転換は避けて通れない現実だと言えます。

また、ますます複雑化する国際社会の政治・経済の攻防も対処しながら、地球規模での持続可能性にも対しても関わりを持っていかなければ、日本社会の持続可能性も担保できません。

■今こそ、持続可能な社会構築に向けた教育（ESD）が必要な時代

こうした社会状況の中で、ESD（本稿ではあえて「持続可能な社会構築に向けた教育」とします）が提唱され、各国での取り組みが進められていることを再認識する必要があります。人類の未来への様々な角度から警鐘が鳴らされているといっても過言ではありません。国内だけでなく、国際的にも難題が山積していますが、全て人間由来の問題である以上、人間同士の関係改善以外に解決の道はありません。

そのために必要なことがESDの普及です。「人類の知の総合化」という作業プロセスを通して、「人類共通の普遍的な価値観」を見出していく努力の積み重ねが必要になります。

こうしたことを可能にする教育を、家庭や学校、地域、社会といった各フィールドで、どのように発展的に積み上げていくのか。この度の防災・減災といった課題を考えるにあっては、特に、歴史的な視点（地球スケールでの時間軸）が「知の総合化」を図る上での欠かすことのできないポイントとなります。“今を未来につなぐではなく、過去からつながる今を未来につなぐ”を肝に銘じておきたいものです。

「語り部ノート」1997年作成

「セイフティ＆エコガイド」1996年作成

右表：まちを見る視点を表にしたもの
「自然のしくみ」「まちのしくみ」
「暮らしのしくみ」「人の意識」を大項目に
関連事項を列記しています。
（「セイフティ＆エコガイド」より）

防災と環境の統合的視点での地域理解とまちづくり

西宮市環境学習都市宣言　行動憲章「共生」の取り組み

西宮市セイフティ＆エコガイド事業から

■1995.1.17　阪神・淡路大震災で問われたこと

阪神・淡路大震災の後、多くの人々が「人間は地球によって生かされている存在」なんだという思いを抱き、自然への「畏敬の念」や「謙虚な生き方」を大切にしなければならないといった声が聞かれました。

当時、西宮市では震災体験を風化させないために各行政分野の業務の中で自然災害とのつながりを考えるための事業の検討が指示されました。環境局では、環境学習事業「地球ウォッチングクラブ（EWC）」の中で、「地球大好き、自然大好き、人間大好き人間集まれ！」をキャッチコピーに活動を行っており、環境学習との関連で検討がなされました。

大震災の後、子どもたちの中には「自然は怖い」「自然が嫌い」「地球にはかなわない」といった感情が生まれ、それまでの自然に対する「自然は素晴らしい」「自然は恵み」「自然と仲良くなろう」といった考え方だけでは、本当の自然とは向き合えないということを思い知らされました。しかし、私たち人間は自然の中でしか生きていけないのも現実です。人間にとって都合のいい自然とだけ「共生」するというはできません。「自然災害」との「付き合い方」も身につけなければならないということに気付かされました。

「自然・環境」と「防災」という2側面から私たちの地域や暮らしを捉え返し、自らの意識や社会の制度を見直してみようと「西宮市セイフティ＆エコガイド事業」が立ち上がりました。同事業で地域の自然やまちのしくみ、人々の意識を振り返るための視点を整理したセルフガイドとして12枚のワークシートが作成されました。しかし、これらのシートを使ったセミナーでは、参加者の多くは自分たちが暮らしている地域のことについて充分に理解できているとは言い難い状況でした。

こうしたことから地域の歴史や自然の移り変わりについて理解し、次世代に伝えていく市民の「語り部」養成が必要だと考え、西宮市内の自然や歴史、防災について体験しながら学ぶ「語り部養成セミナー」が実施されました。（後述）そして、受講生が自ら「語り部」となり、子どもや市民に地域のことを伝えていく役割を担ってもらうしくみが誕生しました。

S&E ウォッチングポイント							
自然のしくみ	地域の地歴	5000年前	1000年前	500年前	50年前	5年前	
	地域の土地特性	海抜(高さ)	平地、斜面(形状)	河川、池沼の有無	地下水脈の有無	後背地の状況	
		地盤の性質	造成の有無				
	地域の気候や風土	地震断層の有無	台風の通過頻度	局所的豪雨地域	地すべり地域		
	地域の生態系	陸域の生物相	水域の生物相	身近な生きもの相	広域的なつながり		
まちのしくみ	町の変遷	町の誕生	町の歴史	町・地名の由来	町の産業など	緑地面積の大小	
	町の特性	町の性格	街区整理状況	建築物の種類	民家の密集度	道路、鉄道網	
	都市機能	食物の自給力	生活範囲	水循環のしくみ	エネルギー循環のしくみ	物流のしくみ	
	コミュニティ	地域活動の活発度	祭りなどの有無	地域の取り決め	ボランティア活動	情報の伝達ルート	
	公共空間	地域の自立性	防災設備など表示	産業廃棄物	行政との接点	事業所との接点	
暮らしのしくみ	自活力	野外生活術	農作物の栽培技術	基礎体力の維持	町の地理把握		
	代替ライフライン	井戸の保存	用水の再利用	雨水貯溜	ソーラーシステム		
	自宅などの構造	耐震構造	風水害への配慮	地盤改良	緑化推進	室内環境	
	消費生活	家財資産スリム化	保存食の見直し				
	ごみ・リサイクル	物品購入の抑制	ごみの排出量抑制	リサイクルしくみ			
人のいしき	自然生態系の理解	生態系のしくみ	人間活動の影響				
	自然災害の理解	地球の構造	発生メカニズム	不可避性	最小限被害		
	自然界から学ぶ力	気象・気候の変化	動・植物の変化	自然との対話能力			
	ライフスタイル	エネルギー省力化	資源省力化再利用	自然保護意識	環境配慮優先		
	地域への愛着	地域学習	地域活動への参加	環境学習への参加	ボランティア意識	社会活動への参加	

「セイフティ&エコガイド活動マニュアル」ワークシート

ワークシートは12項目から成っています。ここでは、「くらし」「防災」「自然」「教育」「産業」の視点で分類し、一部を紹介します。

くらし

No.1 ＜提案！セイフティーでエコロジーな町・くらし＞

毎日の生活の中で、防災や環境を差し迫った自分ごととして考えることはあまりないことです。このシートでは、暮らし方、ライフスタイルを見直すものになっています。

No.9 ＜セイフティーでエコロジーな暮らししてます？＞

No.9では、自分の生活に対する意識イメージを確認するとともに、数値的に家庭での消費を調べ、考えます。

①「わが家のエネルギーチェック」冷暖房にどのような器具をどれだけ使用しているかを把握します。

②「わが家の家財道具（電化製品を含む）」絶対必要なもの、なくてよいものそれぞれベスト10、古いもの、環境に役立つもの、地震に強いものベスト5を書き出す。

③「廃棄物量調べ」1ヵ月の排出量　ごみ、排水（同等と考えられる使用した水道水の量）、排気（ガス、ガソリン、電気、ごみ）を調べます。

No.10 ＜住まいの中のセイフティとエコロジー！＞

No.10では、住んでいる家の造りを確認します。住宅事情は様々ですが、セイフティとエコの視点で考えることができる参考例を紹介しています。

防災

まちを知り、
セイフティとエコのバランスを考える

No.5 ＜自然災害の歴史とあなたの町のつながりは？＞

No.5では、自然災害の歴史とまちのつながり、

裏面では台風の通過したコース図や梅雨の豪雨による水害にあった地域図、人的被害、住居被害状況の数字が掲載されています。

西宮市では、先にも述べたように、昔海であった場所、古い河川の氾濫原であった場所、河川を寸断した場所などに被害がみられました。大きな被害の後には、河川水路の改修が行われたり、ポンプ場などの設備が配置されています。それらの設備もその被害が継承され、認知されねば、街並みに埋もれた単なる建物に終わってしまいます。

No.8 ＜あなたと家族の自活力チェック！＞

NO.8は、災害が起きた時の行動、自活力をチェックする内容です。食物の調達、調理など器材やエネルギーに頼らずに食べることができるか、野外での生活力があるか、災害時の避難や地域状況、情報の入手ができるかなどのチェック項目を設けています。

No.11 ＜町の「セイフティ＆エコロジー度」チェック！＞

No.11では、住んでいる地域の「町名の由来」、ライフラインの供給元など「まちの基礎知識」を確認します。裏面では、実際にまちを「ウォッチング」し、評価するワークシートです。

自然

自然から学ぶ

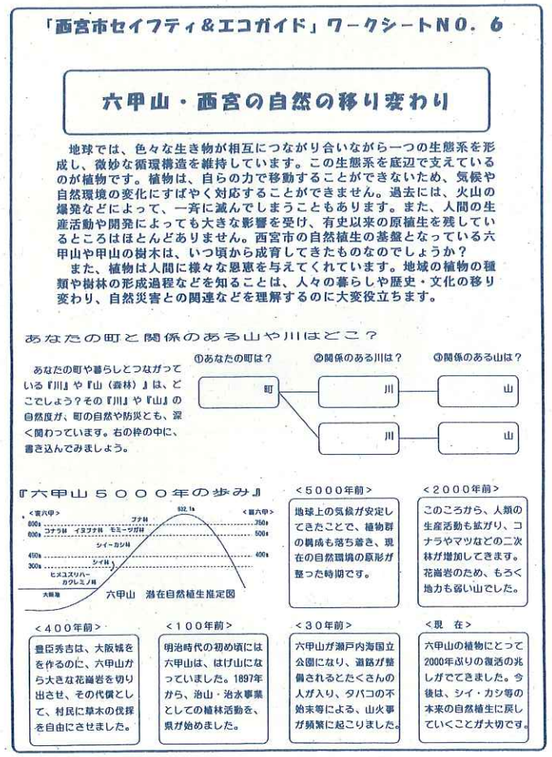
No.6 ＜六甲山・西宮の自然の移り変わり＞

No.6は、身近にある山や川、植物の種類や樹林の形成過程を知り、自然災害との関連を理解する内容です。

No.7 ＜生きものが教えてくれるセイフティ&エコ！＞

生きものの多くは危険が近づくと普段とは違う行動をとると言われています。わずかな自然現象や人為的な要因により生息が出来なくなる生きものもいます。

No.7　は、普段から生きものや自然現象の変化に気づくことが大切であることをあげています。



産業

地域特性を学ぶ

No.3 ＜あなたの町は昔々…海でした？＞

No.3では、土地の歴史を知り、地域の特性を考えます。1000年前の海岸線の地図（P.7に掲載）を載せ、長いスパンで昔の地形を知ることにより、特性を活かした産業が発展してきたことがわかります。

西宮市の「宮水地帯」は、酒産業の発展とつながるわかりやすい例となっています。

教育

地理、歴史、地域学習などを基礎に
想像力を加える

No.2 ＜あなたのすみかはどこですか？＞

No.2では、土地を立体的に見ることを提案しています。水害、津波など水の防災には、地形や標高を考えることが大切です。

No.4 ＜あなたの町がのっている大地のこと＞

No.4では、地球誕生以降の土地の歴史を調べ、地下の構造を見直します。地球は生きていて、大地は少しずつでも動いていることを忘れずに、「まち」がある土地の性質を知り、防災を考えます。

No.12 ＜発見しよう！昔の人の自然との付き合い方＞

昔から伝わる生活風習や言い習わしなかには、過去から歴史的な体験を語り継いでいるものがあります。

No.12は地域に長く住んでいる人から地域の話を聞き取り調査をします。また、こういったコミュニケーションをとることにより、人とのつながりに結びつきます。

・地域に古くから住んでいるお年寄りがいるか
・古地図などの古い資料が残っているか
・過去にあった大きな水害、台風、地震などについてインタビューをする

（No.12裏面、インタビュー項目続き）

第1期「語り部」活動について

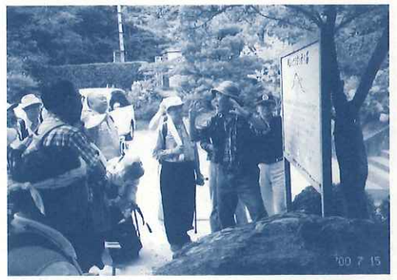
1997年、「語り部ノートにしのみや（セイフティ&エコガイド資料集）」が作られました。この資料集は、西宮市の歴史、自然、文化について地区別にまとめたもので、震災後に実施された「環境ボランティアセミナー」での故近藤浩文氏（当時西宮自然保護協会副会長）の講演テープを元に西宮市の環境学習事業のサポートボランティア（EWCボランティア）が文章化、加筆し、編集されました。

編集後記には、震災後、私たちが自然とのかかわり、土地のいわれなど都市化の中で気付かずに過してきたこと、コミュニティへの関心の希薄化などを省みて、『…今まで私たちは、ひょっとしたら単に西宮に住んでいただけの「住民」だったかもしれません。しかしこれからの暮らし方で正すべきは正し、災害に備え、多くの方々と手を携えて子どもたちを育んでいけるような、自立した「市民」になっていきたいものです。自分たちが住むこの西宮のことを、行政や他人任せにしないで、自分たちも考えかかわっていくこと、それが成熟した「市民」としての役割だと思います。』と記されています。

1998年度には、自然と共生しながら安全で環境に配慮したまちづくりを進めるために、地域で活動を進めるコーディネーターを育てることを目的とした市民対象の「活動推進トレーナー養成セミナー」が実施されました。このセミナーは、地域学習を行うための主旨理解とコーディネーターとしての役割りについての2回の講義、2回の実地研修と計4回のセミナーでした。そして、研修修了後、西宮市内をもっと知りたいとの希望が多く寄せられ、次年度からの「まちの語り部養成セミナー」が始まりました。

1999年度、「まちの語り部養成セミナー」は、市内を７地区に分け、1地区のコース約7kmを9時30分から15時30分まで、一日を使って歩きました。ハードなスケジュールでしたが毎回20数名の参加があり、全回参加という熱心な受講者もおられました。

2000年度は同じコースに1地区を加え、２年目の受講者の学びを深めました。2001年度は9地区を設定し、それまでの語り部セミナー受講者が5～6名で1コースを担当するスタイルができました。各コースの担当者による「語り部ノート」の改訂版も作成されました。



西宮市立甲山自然環境センター前で故近藤浩文氏を講師に「甲山のなりたち」を学ぶ2000年度セミナー生。実地を歩きながら、その地域の歴史、地形、文化、自然などの特色を学ぶ。

町名から土地の地歴が分かる

西宮市史に掲載されている活断層図面や平安時代の海岸線の推定図です。「町名」から推定できる土地の歴史と実際の地形などを関連付けて見てみると多くのことが分かります。

津（つ）とは「港」を意味する言葉で、「門（と）」は「入り口」を意味します。つまり、港の入口が「津門」です。この津門の地名がついた豪族名として津門石（つとのおびと）という名称が、古墳時代にあります。ここでは、西宮で唯一の銅鐸が見つかっており、津門大塚古墳や稲荷山古墳があったようです。西宮で古くに栄えていたのは「津門」のようです。

この津門の入り海には御手洗川（171号線付近で）や夙川（西田公園付近で）が流れ込んでいたようです。しかし、夙川は750年ほど前に川筋を付け替え、南に直進するようになりました。また、御手洗川も土砂を運び込み、津門の入り海を埋め、今の川筋は当時の海岸線に沿って出来たように思えます。「深津町」の地名もその由縁でしょう。その後、津門の入り海は内陸化し、新しい港として「今津」が誕生しました。

現在の阪神今津駅の北側の旧国道沿いには、段差や坂道があります。松原神社の南側や西宮神社の赤門前東側の旧国道沿いの南北の道も坂道になっています。これらの場所に立つと、千年前の海岸線を見ることが出来ます。

西宮市の南部地域のほとんどは海だったことになります。市役所のあるところだけが島になっていました。また、現在の宮水井戸のあるところ（石在町）は砂嘴（さし）の先端に広がった出島のような場所（貝層の混ざった地下水）でした。この自然地形が西宮の地場産業としての「酒造り」を誕生させ、西宮を繁栄させました。

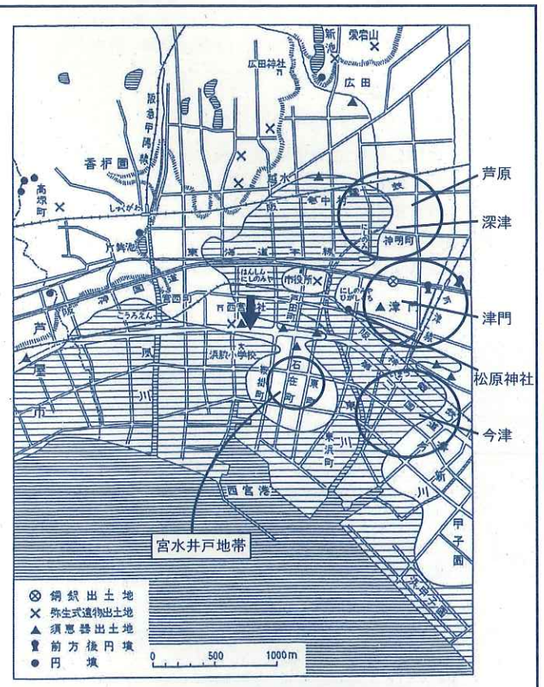
一方、阪神淡路大震災の時に、新幹線、阪急電車、高速道路の高架や橋脚が倒壊したなど、多くの場所は、昔、海であったり、河川や池だったところです。このように、震災や水害などの自然災害は、その地域の地形や地質などが大きく影響しました。

わずかに盛り上がった先は東西にのびる砂州が道となった旧国道。
（➡ は、右の地図中と同位置）

13カ所のクイズポイントを各団体が受け持ち
参加者はクイズを解きながらゴールに向かう

セイフティ&エコガイド事業が始まった当初は、受動的な学びから始まりましたが、回数を重ね、自らの体験や思いを通して、「まち」を知る楽しみと学びを他者に伝えていこうという活動に積極的に取り組んでいただけるようになりました。

2002年度からは、NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）のボランティア「語り部倶楽部」として、市民や小学校の地域学習の支援活動が始まりました。担当地域メンバーでコースや時間を設定し、年間3～5回のセミナーを実施してきました。また、LEAFの事業の中で、小学校の授業や公民館などの地域学習の講師を務めることも増えました。2008年には、西宮市新入職員や教職員研修でタウンウォッチングの講師をし、まちづくりを考えるグループワークを手伝いました。



武庫入り海の推定復元図　田岡香逸作図（出典：西宮市史第一巻）

にしのみや・ふるさとウォーク

西宮市では、2007年度から毎年、地域、行政、各種団体が連携して、地域を歩き、クイズを解きながら市民が学ぶ「ふるさとウォーク」が開催されています。ESDの概念を知ってもらい、持続可能な未来に向け、よりよい「まち」づくりを考える目的とともに、「セイフティ＆エコ」の視点からも地域を学べるイベントで、毎年約700名の市民参加があります。

家族・グループ参加者が地域に設けられた西宮の環境、福祉、平和、防災、産業など主催団体が担当するクイズポイントでクイズを解きながら、ウォークを楽しみます。このような事業で「語り部」がポイントを担当するなど、様々な事業との組み合わせで、活躍する場面が作られたことも「語り部活動」を活性化しました。

＜LEAF語り部倶楽部　活動小史　2003～2011年＞

2003(H15)「西宮の歴史と自然をたずねて　西宮の山を発見」　計５回
鷲林寺・甲山、甲陽園・北山緑化植物園

「西宮の川を発見」
甲東（百間樋）、武田尾（武庫川廃線）、瓦木（新堀川）

2004(H16)「語り部セミナー」　計４回　（阪神ボランティアサポート協会助成）
北部を知ろう（武田尾、名塩）
まちの歴史と自然（広田、甲子園）

2005(H17) まちの語り部による「エコツアーガイド養成セミナー」計５回
（阪神ボランティアサポート協会助成）
西宮～津門、甲東～甲山、甲山～甲陽園
「語り部倶楽部研修」計２回（甲山、公園の自然）
＊JICA事業、EWC事業、など環境学習事業への協力始める

2006(H18)「語り部セミナー」計３回　（ゲンゼラブアース倶楽部助成）
段上、夙川、
講義「西国街道と甲東地区」（講師：大崎正雄氏）

＊EWC津門川ラリー、JICA研修留学生セミナー、
小学校地域学習授業　など６件

2007(H19)「語り部セミナー」計７回　（ゲンゼラブアース倶楽部助成）
塩瀬、甲山、今津、旧瓦林村、なぎさ回廊、
講義「夙川右岸の歴史・文化」（講師：山下忠男氏）
「日本人の生活と植物」（講師：片山　雅男氏）
＊EWC事業、など環境学習事業に協力

2008(H20)「語り部セミナー」　計5回　（ゲンゼラブアース倶楽部助成）
広田、鳴尾、生瀬、苦楽園、「甲東」（講師：大崎正雄氏）

＊西宮市新入職員研修、教育委員会環境教育研修に協力
西宮市生涯学習講座で活動紹介

2009(H21)「語り部セミナー」　計3回　（ゲンゼラブアース倶楽部助成）
西宮北口、山口、
講義「甲子園ホテル」講義（講師：三宅正弘氏）
＊西宮市教職員初任者研修に協力

2010(H22)＊「地域の河川水路からまちの歴史を考える」計5回
用海地域、大社地域
西宮市教職員初任者研修、生涯学習講座講師

2011(H23)＊西宮市教職員初任者研修、生涯学習講座講師
中学生「トライやる」地域学習

＊1998年（H10）～2002年（H14）は西宮市事業として
「まちの語り部養成セミナー」が実施されました。

エココミュニティ会議での地域学習

「エココミュニティ会議」は、2003年に西宮市が行った「環境学習都市宣言」の理念を実現するために策定された「新環境計画」の中で、地域住民が自主的に地域の課題を見つけ、その課題解決に向けて検討を重ね、持続可能なまちづくりをめざす「場」として設置されています。

現在、市内の17地域でエココミュニティ会議が活動しています。自治会、地域団体、PTAなど、構成メンバーの所属や地域の課題は様々です。

LEAFでは、三井物産環境基金活動助成を受け、「環境学習を通じた持続可能な社会システムの実証的開発」を実施し、その一端として、エココミュニティ会議のメンバー対象にまちづくりの基礎となる情報の勉強会を行っています。2010年度に「河川水路から地域の歴史を考える」、今年度は市内の環境や防災に関する現地視察を4回行います。

■河川水路からまちの歴史を考える

2010年度に実施した鳴尾地域は、近くを流れる武庫川の氾濫が過去に多かった地域です。現在は河川の改修、埋立などで水路網が目に見えなくなっています。過去を知り、地域を防災面から捉える学習をしました。

浄水場の見学ー上水がどこから来ているのか、どのように配水されるかを学びました。

武庫川の支流申川が廃川になった後に甲子園球場が造られたこと、道路沿いに堤防の松が残っていることなどを説明する語り部。

■環境・防災関連施設・フィールド学習バスツアー

①「西宮市海岸部の自然と防災を考える」 …… 1月18日（木）

第1回フィールド学習は、7地区のエココミュニティ会議メンバー等21名が参加しました。西宮市の南東部地域は武庫川の氾濫により形成された、砂地の広がる地形です。また市役所周辺など1000年前には海であった場所、3つの河川が合流する地域など、自然災害との関係が深い地域が多々あります。

今回、普段、目にすることのない防災の施設を見学し、現在の安全な暮らしを保つための「防災」について「人ごとではないこと」を再確認しました。

コース：市役所ー旧枝川樋門ー鳴尾新川ー高須、浜甲子園の歴史ー甲子園浜自然環境センターー新川排水機場ー東川排水機場、東川、津門川、六湛寺川ー旧西宮港、御前浜堤防、夙川河口、夙川ー勤労会館、東川、市役所、海清寺クスノキ

新川排水機場では、高潮と川の増水が起きた時、水門を閉め毎秒20tという勢いで海に排水する。

今後の予定

②2月13日（月）9:00-16:45
清掃工場など環境関連施設の取り組みを考える
③3月14日（水）9:00-17:00
西宮市南部の自然と防災を考える
④4月18日（水）9:00-16:45
西宮市北部の自然と防災を考える

■大社エココミュニティ会議

大社エココミュニティ会議では、地域を知り、防災にも役立つことを活動テーマの一つに挙げています。2010年度はエココミュニティ会議の構成メンバー対象に地域学習を行い、2011年度は小学生の親子対象に「親子で歴史探検」を行いました。

LEAF語り部倶楽部のメンバーが講師となり、古くからある井戸や発掘されたものからわかる地域の地形などを解説し、エココミュニティ会議のメンバーによりクイズが出題されました。楽しく学べたとの感想が寄せられました。

2011年11月5日の「親子で歴史探検」。大社地域にある広田神社には、1200年前、400年前の地形がわかる看板が設置されています。解説をする語り部倶楽部のメンバー。

PTAの保護者の方のアイデアで、子どもたちが喜ぶように、クイズに正解するとシールを貼りました。

教育の現場での地域学習

■教員初任者研修

2009年度からの初任者教員研修では、語り部倶楽部が講師となり、地域学習を実施。どのように教科学習に活かし、結びつけるかのグループワークを行い、発表しました。

LEAFでは、2009年度から小・中・高・養護学校の新任教員研修において環境教育と地域学習を実施しています。

小学校では持続発展教育(ESD)を進めていく方針が打ち出されており、ESDの実施には「他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、関わりやつながりを尊重できる個人を育むこと」が必要とされています。

地域理解は、ESDの基本です。しかしながら、初任教員の大多数は市外在住であったり、市内の地理、歴史、文化に初めて接するという現状が見られます。研修ではモデル的な地域を歩き、グループで地域から学べる事を検討し発表しました。さまざまな教科をつなぎ、ストーリー性を持たした学習プログラムを考えるなど、身近な地域を素材とし、「つながり」を重視することは不可欠のものとなってきています。

＊感想から

- 私は西宮市に住んでいないので、初めて聞くお話ばかりで、とても興味深かったです。子どもたちに何かを伝えるにしても、自分の足で歩いてみて、声で伝えてもらうことは大きな経験になると思いました。
- 教科書だけを使って教えるだけではいけないと強く感じました。自分の目で見て学び、感じたことを伝えられるようにしたいです。
- 語り部さんの話を聞き、西宮の歴史が分かり、更に自分の学校のまわりの歴史も知りたいと興味をもちました。
- 自分で歩き、見て学ぶ事ができたのが良かったです。自分の西宮に関する知識が増えると、子どもたちに教えるのが楽しみになります。

■小学校での実践 （教育連携協議会主催）

地域を流れる川の様子を観察

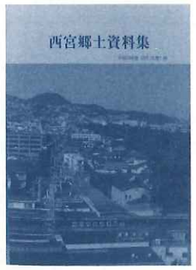
用海地域は、西宮市内を流れる河川3本が次々と合流し、1本の川となって海に流れ込む地域です。古くから河川の氾濫が多く、下流域で水位を調節するポンプ場が設置されたり、高潮対策の樋門もあるなど、防災が地域の課題の一つとなっています。

1月27日、用海小学校では、「用海小学校教育連携協議会」の提案で地域学習を行いました。子どもたちが学校周辺の地形、土地の名前、防災設備などを歩き、「語り部」の説明を聞き地域を学びました。

4世紀ころ呉の国から渡来した織工女が布を染めたと言い伝えのある染殿池の前で織機の小道具を使いながら説明する語り部。

防災公園で、防災に関するものを自分で見つける子どもたち、この後、防災の設備を説明しました。

（※）「教育連携協議会」：学校評議員、学校関係者評価委員をはじめ、その他の学校関係者が一堂に会して、教育に関する情報発信及び啓発活動、学校評価、学校支援、その他学校の諸課題等を協議する合議制の機関。



地域教材

西宮市では、3・4年生対象に地域教材「わたしたちの西宮」、中学生対象に「西宮郷土資料集」を配布しています。これらの副教材には、西宮の地理、歴史、文化、産業、生活、防災の基本的情報が掲載されています。これらの情報をトータルにつなげて学習する視点が大切です。